

F. Zwicky 先生を偲ぶ

小平 桂 一*

本年2月8日に F. Zwicky 先生がカリフォルニア・パサデナ市で他界した。私が彼を知ったのは1967年から69年にかけてカリフォルニア工科大学に居た時のことである。落ち着いた感じのする天文図書室によく現れる眼光の鋭い頑固そうな老紳士が Zwicky 先生であった。その頃の Zwicky 先生は依然として観測に情熱を燃やして、1936年から続けている超新星探査の仕事の重要性を誰彼なしに説いていた。一度談話会で「33年間に41個」というような題で超新星探査の苦勞を語ったことがある。彼は米国西部のカッポイ風のネクタイをつけて演壇に立つと、「今日はネクタイなどしめてきてしまって、失礼お許し下さい。これから結婚式に廻らなくてはならないので……」と挨拶し、「また例の皮肉か！」と笑を誘った。次々に溜っていくシュミット乾板の山に、もう沢山だという声も強いらしく、彼はその乾板に含まれている情報がいかに豊富であるかを強調して、予算配分の継続を訴えていた。「人類が二度と見ることのできない宇宙が撮れているのだ」と説くあたり、老天文家の面目躍如としたところがあった。彼の超新星の統計や分類に関する基礎的な仕事は有名であるが、彼の提唱した探査計画の成果が上って、サンプルの増加とともに改訂が進められつつある。物理部門と合同でやる大講堂でのコロキウムにはいつもやって来て、後の方に陣取っていた。パービッジ氏が QSO の話をした時に、ふいに大きな声で「一般相対論の是非も判ってないのに何たるこった」と一人言を吐いた男がいた。それが Zwicky 先生であった。Zwicky 先生には宇宙の全てが方程式で解けてしまいう相対論が気に入らないようであった。彼の著書に「形態学的天文学」というのがある。私は何度か読もうと思って手にはとったが、まだ読んでいない。けれども、その題名に彼の宇宙観がうかがえる。ギャラクシーの世界の現象は時間変化を観測したり働いている力を直接に決めることは難しい。「太陽系近傍の概念を外挿するよりも、まずよく眺めよう」というのが彼の立場である。それを反映して、Zwicky 先生はギャラクシーの世界をつぶさに観察して様々な基本統計を発表してきた。彼の労作である「ギャラクシーとギャラクシー集団のカタログ」(6巻)には、ギャラクシー(および集団)の形態に特に注意が払われ、「極度に密小」、「連結帯あり」、「爆



発痕あり」等々の記載がある。物質の集中と反集中、集合形態に関する彼の関心は異状なまでに鋭く、「Zwicky の密小ギャラクシー」と呼ばれる一群を乾板上の像により分類定義している。「密小ギャラクシーと爆発状ギャラクシーのカタログ」が最後の著書となっているが、その序文は、老 Zwicky の胸中に去来していたことを残らず書き並べたという調子になっていて、彼を理解してくれる同僚の少なかったことを物語っている。チューリッヒ大学の物理学科を卒業後、1925年にパサデナに移りウィルソン山とパロマー山天文台を中心に活躍してきたが、第二次世界大戦直後にはヨーロッパの科学者を助けるために図書輸送の運動も起し、一生スイス国籍を離さなかった。彼には発明の才能もあって様々な装置に手を出したが、ミルクを入れるテトラパックは最も普及したものの一つである。(彼の形態学的考察の成果!) 私がカリフォルニアに居た間に彼の70回目の誕生日を祝うお茶の会があったから、享年76才ということになる。

× × ×
× ×

* 東京大学理学部